昭島礼拝 2020/4/26

聖書：エペソ 4:29-32
主題：互いに優しい心で
賛美：

みなさん、おはようございます。昭島教会も各ご家庭での礼拝にご協力を頂くようになってから、1ヶ月が経ちました。皆さんの忍耐に本当に感謝します。神様がこれまで皆さんを守って下さっていることを本当に感謝します。これからも神様が皆さんを守って下さいますようにお祈りいたします。すでに何度も申し上げて来て、重ねてのお願いになりますが、お互いのためにお祈りしましょう。そして今苦しんでいる方々のためにお祈りしたいと思います。神様は苦しんでいる方々と共におられ、癒しと慰めを与えて下さるお方です。いのちの与え主である神様は、私たちのいのちのことを一番、気を遣って下さいます。私たちはその神様の愛を信じて、ますます祈りたいと思います。

1～4 月の途中まで、昭島教会の礼拝では、マルコの福音書を続けて開いてきました。今日からエペソ人への手紙を共に見てまいりたいと思います。エペソ人への手紙を開きながら、教会とは何だろうかと考えて行きたいと思います。今、私たちは戦後最大の危機と言われる新型コロナウイルスの猛威を受けています。たくさんの方が苦しみ、命を落としています。そして今後、さらに拡大していくのを防ぐために、私たちは努力をしています。そして皆様にもご協力を頂いて、各ご家庭での礼拝、祈祷会を守って頂いています。昭島教会 50 年の歴史の中で、積極的に外で礼拝しましょうということとは別に、会堂で礼拝できなくなるということは無かったと思います。当たり前のように、皆さんで会堂に集まって礼拝ができると思っていました。しかしそれが難しくなった今、会堂に集まって皆さんで共に捧げる礼拝、賛美、お祈り、そしてお交わりがどれほど貴重なことであったかと思います。ですから今、私たちは教会とは何だろうか、礼拝とは何だろうか、よく考えたいと思います。神様から聖書を通して教えて頂きたいと思います。しかし教会の歴史を振り返りますと、会堂で礼拝ができないという事態は、初めての経験ではありません。昭島教会では初めてかもしれませんが、2,000 年の教会の歴史では初めてではないのです。ですから何か必ず、突破口があるはずです。教会が教会であるということが、会堂以外にも何かあるはずです。エペソ人への手紙を読み進めていく中で、そのことを神様から教わりたいと思います。

エペソ人への手紙はパウロという人が、エペソの教会に宛てて書いた手紙です。またもしかしたらエペソの教会だけでなく、その他の周りの教会にも回して読まれたかもしれません。他の手紙の中で、パウロは自分の手紙をいくつかの教会で回して読むことを勧めています。エペソ人への手紙も、他の教会でも読まれたことでしょう。このエペソ人への手紙は、神様がキリストにあって共同体をつくられるという奥義を記しています。これは、長年聖書を研究し、神様から教えられた神様の「奥義」であるとパウロは言っています。神様が私たちをキリストの十字架によって救い出して下さったのは、私個人が汚れのない者となり、神の国に行くということだけではないのです。私と私以外の人がキリストによって結び合わされて、共同体となり、互いに愛をもってキリストのからだを完成していくのだとパウロは言います。私たちは救いを考える時、もしかしたら自分の、個人的な救いだけを求めるかもしれません。しかしそれは、ある意味で自分のことしか考えていないので、罪と呼べるかもしれません。罪とは自己中心、自分のことだけ考えるという事だからです。パウロは言います。よく考えてごらんなさい。キリストは私たちを、自分だけが良ければいいという罪の世界から救い出して下さったのです。だから私たちはこれからは互いの

ことを考えて生きるべきです。と語っています。

今日はエペソ人への手紙の 1 章ではなく、途中の箇所を開いて頂きました。それはエペソ人への手紙の学びを始めるにあたり、そして今日の状況を考えるにあたり、まず見たい御言葉があったからです。4:32 に「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです。」キリストが私たちを赦して、罪から救って下さいました。だから私たちも互いに親切にしたいと思います。パウロはこの逆の生き方についても書いていますね。それはどのような世界でしょうか。4:31 には「無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしり」と書かれています。互いに親切にしあうの反対は、慈悲の心を持たないということです。優しいの反対は、怒り、怒号、ののしりになりますでしょうか。そのようなものがあふれた世界はとても悲惨です。しかし自分中心の生き方をするならば、このような世界になってしまいます。

今、私たちは新型コロナウイルスの影響で、未曾有の危機に直面しています。コロナウイルスはいのちに関わる問題です。感染を防ぐこと、それは私たちのいのちを守るために重要な事です。しかし私は、この事態をより困難にしている原因の一つとして、自分中心の生き方から離れられない人間の姿があると思います。というのも、その自分中心な生き方でもいいのではないかという社会的風潮が近年ずっとあったからです。3 月末に各学校での卒業式が行われました。どの学校も異例の卒業式になりました。インターネットで読売新聞の記事が少しだけ紹介されていたのですが、東京大学の卒業式のことが書かれていました。卒業式の中で、五神(ごのかみ)総長はこのように言っています。「この感染症の拡散を目の当たりにして、現代の人々の活動や経済社会の仕組みが、いかに国境を越えたものとなっているのかを、皆さんも実感したのではないでしょうか。近年、「自国第一」を唱える主張が目立つようになりましたが、グローバル化はすでに後戻りできないところにまで浸透しているのです。限られた地域の利害にのみ目をむけた行動が、いかに無力であるのか。この感染症への対処の経験は、そのことをはからずも明らかにしたのです。」東大の学長も、自国第一主義が人類共通の敵であるコロナウイルスに対してどんなに無力であるかを示しています。そして皆さんも日ごろ、ニュースを聞きながら感じておられるのではないでしょうか。役に立つ情報もあれば、役に立たないのではないかという情報もある。特に「無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしり」がいかに自分のことしか考えていない発言で、みんなのためにならないかを感じておられると思います。誰かを批判しても、ウイルスは止まらないのです。また自分は平気だからという理由で行動を制限しないならば、他の誰かを苦しめることになってしまうかもしれません。それよりも今大事なことは、誰かのために自分の取るべき行動を考えるという事です。東大といえば、知識で言えば、京大と併せて日本のトップですよね。五神総長は東大の卒業生たちを、「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。その上で、彼らが知のプロフェッショナルとなったのは、自らの知的探究心を満足させるためではないと言います。地域に根ざし、自分たち研究者以外の方々と連携し、共に発展していくためのものであると語っています。自分のための知識ではなく、他の人と共有すべきもの、もっと言えば、他の人のために使われるべきものなのです。そのために東大は知識を収集し、探求し続けています。自分のための知識ではなく、誰かのための物なのです。

エペソ 4:32 の「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです。」の言葉は、こういう生き方もできる。他の生き方もできるというような選択肢の一つとして語られているわけではありません。先ほど言ったように、この逆の生き方、自分のことだけを考えて生きるという世界から、私たちは救い出されたからです。せっかく救い出されたのに、戻っていく生き方はできません。自分中心の生き方に戻って

しまえば、大変なことになると分かりました。しかし私たちは自分の力でその自分中心の生き方を変えることは難しいでしょう。でも安心してください。神様が私たちを変えて下さるのです。神様は私たちを愛し、私たちがそのような悲惨な状況なってしまうのを望まず、私たちを救い出して下さったのです。だから神様は私たちの心をも変えて下さいます。4:29 でパウロは「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい。」と言います。でも私たちはつい悪い言葉を言いたくなります。その時、ぐっとこらえて、神様を見たいと思います。そして神様にその愚痴を言ってみましょう。神様にそんな愚痴なんか言ったら罰を受けるのではないか？そんなことはありません。神様はその愚痴を、「そうかそうか。」と受けとめて下さいます。そして私たちの前身を神様のおおきな愛で受けとめてくださいます。その時、私たちは神様の愛を感じ、神様の愛に満たされて、自然と赦せるようになると思います。キリストが私たちを赦して下さっているからこそ、私たちは人を赦せるのです。キリストが私たちを助けて下さるからこそ、私たちは人を助ける事ができます。キリストが私たちに希望を与えてくれるからこそ、私たちはこのような苦難の中にあってさえも、希望をもって、キリストにある平安の内に歩むことができるのです。